



3階の8畳和室。45度傾け、飾り銅板 (p.12) が嵌め込まれた東側の窓。



3階の8畳和室。西側の床の間。



3階には南(写真奥)より8畳・6畳・10畳の和室が3間続きになっている。ライトの原設計に和室があったかどうかは不明だが、施主の強い要望により実現したようだ。



3階西側の廊下。連続する大きな窓にいくつもの飾り銅板 (p.12) が嵌め込まれており、西日によって浮かび上がるシルエットが雰囲気を出している。



電球のソケットにも幾何学模様のデザインが見られる。



3階洗面室前廊下の幾何学形の天井。これより奥(北)に主寝室や婦人室が配置されている。



3階の洗面室。建築当初より電気による湯沸かし設備が導入されており、温水と冷水の蛇口が対になっている。水切りには、ガラス棒が用いられている。

タイル張りの浴室。洗面室と同様、温水と冷水の蛇口がある。



トイレには、東洋陶器株式会社（現在の TOTO 株式会社）の大正 10 ～昭和 3 年〔1921 ～ 1928〕の商標がある手洗器が残る。

飾り銅板

銅板を型抜きしてハンダで組み合わせた幾何学模様ので、銅錆によって青緑色になっている。建具など、本建物内のさまざまな場所を飾る。



4階の食堂は天井が最も高く、四角錐の形は教会のような雰囲気。幾何学模様が施されたマホガニー製の飾りや三角形の小窓などが特徴的。



3階の主寝室に置かれている机と椅子。平成 26 年(2014)に竣工 90 周年を記念して復原された。

阪神・淡路大震災の痕跡

平成 7 年(1995) 1 月 17 日午前 5 時 46 分に発生した、阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）は、本建物にも大きな被害をもたらした。この震災を受けて、平成 7 ～ 10 年(1995 ～ 1998)に災害復旧工事が実施され、建物全体に生じた亀裂の補修や、破損した大谷石の修復を行った。この際、地震により生じた 1 階倉庫の壁の亀裂を補強した上で、震災の痕跡として一部保存している（非公開）。





ライトの建築の特徴の一つであるキャンティレバー(片持ち梁)。壁よりも外側に飛び出した庇がキャンティレバーにあたる部分で、南信はこれを「夏帽子」ととらえた。「夏帽子」の帯部分には、擬石飾りが巡らされている。



煙突と屋上バルコニーの階段。次へ続く空間をより広く見せるため、トンネル部分が非常に狭く設計されている。

ぎせき 擬石飾り

大谷石の碎石と川砂を混ぜたセメントを固めてつくられている。門構えのような形態のAタイプと、中央が突き出たBタイプの2種類がある。Bタイプは、文化財指定以前にすべて撤去されていたため、壁に残っていた痕跡等から推定復原されている。



Aタイプ



Bタイプ



バルコニーから望む眺望。芦屋の市街地を中心に、広く見渡せる。

フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright)

1867～1959年。アメリカ合衆国ウィスコンシン州生まれ。ル・コルビュジエ、ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエとともに近代建築三大巨匠と称される建築家。「有機的建築 (Organic Architecture)」を提唱し、建築理念として自然と建築の調和を掲げた。生涯で行った設計は1,000件を超え、その内の400件以上が実現したが、母国アメリカ以外ではカナダと日本にしか存在しない。代表作は、落水荘 (Fallingwater・カウフマン邸、1935年竣工)、グッゲンハイム美術館 (1959年竣工) など。日本では、旧山邑家住宅 (ヨドコウ迎賓館) のほか、旧帝国ホテル (大正12年〔1923〕竣工) や、旧帝国ホテルの支配人を務めた林愛作邸 (大正6年〔1917〕)、自由学園明日館 (大正10～14年〔1921～1925〕) が現存している。

ライトは設計に取りかかる前に自ら芦屋を訪れ、この場所をととても気に入ったと言われているが、六甲山からのびる丘陵地形や周辺の緑と一体化して建てられた本建物は、まさしくライトの建築理念である有機的建築と言える。

